

平成28年度 第4回（震災後第68回） 陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「通いの場づくり ～つながりを持ち続ける理由～①」

日時：平成28年7月22日(金) 13:30～15:30

場所：陸前高田市役所 4号棟第6会議室

参加：43名 11団体

資料：下記にアップ

<http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>

1. 挨拶

菅野民生部長

本年度、民生部は「地域に打って出よう」ということを掲げて活動しており、未来図会議においても、災害公営住宅の中で新しいコミュニティをどうつくるのかという議論をしてきた。きょうは、今後の新たなキーポイントとなる地域での居場所、通いの場と提唱しているが、「その部分を新たにつくるものなのか、それとも目を向ければ既にあるものもあるのか」「はまってかだつての拠点となるような部分が本当にあるのか、それをどうつくっていくのか」を皆さんでお話しいただきたい。

2. 内容

(1) 未来図会議のめざすところと「これから」

・陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏

(2) 報告

報告「市内のあるもの（宝物）探し、地域の通い場探し」

・民生部地域福祉課 課長補佐兼地域福祉係長兼社会福祉士 馬場勝基氏

活動事例①竹駒町 店舗型通いの場「ワーカーズコープ」勝沼雅典氏、古澤光氏

活動事例②広田町 住民主導型通いの場「泊お楽しみクラブ」藤原紀久子氏

活動事例③矢作町 男の通いの場「精米所サロン」※ビデオ出演

(3) グループで「はまってけらいん、かだつてけらいん」

・テーマ：つながりを持ち続けている事例から学ぶこと

・すごいね！ すばらしいね！ なぜ続けているの？ 何が大事ななの？

・次の具体的な実践につなげるには？ 自分の地域にはないかな？…

(1) 未来図会議のめざすところと「これから」

(陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏)

この未来図会議でめざすことは、住民の生活にかかわる関係者が集まり、住民一人一人が健康で文化的な生活及びノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりをどうやってつくっていけるか、皆さんと一緒に考え続けることである。

私は、三十五年医者をやってきたが、健康づくりの考え方は随分変わってきた。以前は病気になる人生を目指して、「健診を受けたか、食べ過ぎに注意しよう」と注意してきたが、それでもなかなかよくならない。

健康日本 21 が 2000 年に始まったが、そこでは居場所のある人生を目指して、本人が頑張る「自助」、地域住民がつながってお互いさまで助け合う「互助・共助」、さらに「公助」の 3 つが大事だと言っている。今一番行政が力を入れなければいけないのは、ネットワークづくりである。人と人をつなぐことが大事だということが、ヘルスプロモーションの考え方なのである。

もう一つ大事なものは「生活の質の向上」と「社会参加の機会をふやす」こと。社会に出ている方々は、健康寿命も延びるし、生活の質も向上するということがわかってきた。そのために何が大事かという「ソーシャル・キャピタル」、日本語でわかりやすく言うと「地域のつながりを強化しよう」ということである。このソーシャル・キャピタルは信頼・ネットワーク（絆：きずな）・お互いさま（絆：ほだし）がもとで人は健康になり、自殺も減る。それ以外にも、まちおこしや防犯の点もよくなることがわかっている。

では、どうやってソーシャル・キャピタルをつくっていけばいいのかというと、これが当たり前にできるのは、はまってけらいん、かだつてけらいんが浸透したまちである。そのためには、はまかだスポット、通いの場があれば、人は社会にも出て行くし、元気になっていくのではないか。このソーシャル・キャピタルは、はまかだスポット、通いの場があるところでどんどん育っていくわけである。きょうは、陸前高田市の中にソーシャル・キャピタル（＝はまかだスポットや通いの場）はどこにあるのか。それを具体的に教えていただき、皆さんに何かを感じて持ち帰っていただきたい。

(2) 報告「市内のあるもの（宝物）探し、地域の通い場探し」

(民生部地域福祉課 課長補佐兼地域福祉係長兼社会福祉士 馬場勝基氏)

7月の「通いの場づくり～つながりを持ち続ける理由～①」というテーマだが、実は陸前高田市で既に活動している3つの団体がある。きょうは、この団体に途中で発表していただきながら進めていきたいと思う。

まず「市内のあるもの（宝物）」だが、地域の通いの場を探すということで、気仙地区の民生児童委員協議会の岡本会長が中心となり、民生委員・児童委員の協力のもとで水上の災害公営住宅の集会所でお茶っこのみの会を行っている。災害公営住宅や仮設住宅に住んでいる方、近隣の方、さまざまな方が集い、はや1年になるが、先日私たちもお招きを受けて行ってきた。この水上サロンに集っている方々はほぼ女性で年齢もまちまちだが、非常に明るく楽しく元気よく、カラオケやゲームをして盛り上がっていた。

それを「きょういく」や「きょうよう」という。漢字で書くと学校の教育や教養を高めるという話になるので、ここはあえて平仮名にした。「きょう、どこどこに行く予定がある」というように置きかえてほしい。例えばリハビリを一人で黙々とやれば筋力は維持できるが、地域で生きていくためには必ずかかわりや活動性・社会参加が不可欠になる。つまりリハビリは自分自身を鍛えるためだけのものではなく、社会生活や地域生活ひいては在宅生活に根差したものでなければならない。したがって、かけがえのない構成員になることが地域においての役割、その人の存在意義を高めるのではないかと思う。

それでは、既に地域で実践している3つの団体に順次報告をお願いしていきたい。

①勝沼雅典氏：

最初に同じ仲間の古澤から、私たちの団体ワーカーズコープについてお話しし、それから説明をしたいと思う。よろしくお願ひしたい。

古澤氏：

ワーカーズコープは、30～40年前ぐらいから失業問題をテーマに掲げている団体である。子育て中のお母さんや障がいのある方、年配の方など、働きたいと思う人が誰でも働ける社会をつくっていかうということで、草刈りや掃除の仕事から始め、最近では福祉や地域に貢献できる仕事をしている。

2011年7月に東北復興本部（仙台）を設置し、岩手の大槌と陸前高田・宮城の気仙沼・南三陸・石巻・亘理・登米の7つの地域でそれぞれ暮らしている人たち自身が、自分たちのまちに必要なことを自分たち自身で仲間を集めてつくり上げていく、そのお手伝いを一緒にやっていきたいということで活動している。

勝沼雅典氏：

ワーカーズコープが高田で活動拠点にしている直売所は、2013年3月に旧森の前地区に開所し、盛り土の関係で去年の12月に竹駒に移った。ことしは震災から5年という節目の年で、市内のハード面の復興が徐々に進み、住宅の自立再建や復興住宅にどんどん移り変わる転換期にきている。もともとなかった仮設住宅で生まれた住民同士のコミュニティがまた少しずつなくなろうとしている中で、地域で誰もが集える場、住民同士で支える場という新しいコミュニティが必要だと感じている。

直売所を運営しながら、いろいろな能力・技能を持っている地域の方に出会う中で、「今度こういうことをしたいが、一緒にやらないか」と声をかけると、「私は、こういうことができる」「あの人を知っている」と、地域のつながりができ、地域の達人と出会い、そこからサロン活動につながるという状態がある。また、移動販売や仮設に住んでいる方と一緒に共同農園の活動をしてきて私自身が一番感じたのは、「福祉が決して制度の中にとらわれてはいけない」ということである。今後の復興に向け、さらに新たなステージにつなげられるような活動を広げていきたい。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

販売という仕事をしながら、なぜ人と人をつなごうという発想になったのか。

勝沼雅典氏：

陸前高田という地域の“お互いさま精神”がすごい。つい先日もまったく知らない高齢の方が、旦那さんが先に亡くなられて一人でうちにいてつまらないということで、ふらっと来た。「お茶を飲んでいたら」と、私と一緒にわかっている方が声をかけたら、11時～夕方6時まで、本当にお茶を飲みながら自分のたまっていた気持ちを聞いてもらっていた。そういうことを目の当たりにすると、つながりというか、誰かとかかわりたい、人に触れたいといったものが一番必要なのではないかと思った。

②泊お楽しみクラブ 藤原紀久子氏：

私たちが「泊お楽しみクラブ」を立ち上げたのは、昨年11月である。きっかけは、市が昨年4月～7月の間に全8回で行った介護予防教室の陽だまりクラブで、8回で終わることを聞いた地域の高齢者が、「これからも集まりたい」と声を上げたことである。市内はどこも同じかもしれないが、泊地区も高齢者が多く、ひとり暮らしや高齢者だけの世帯、若い人と住んでいても昼間は一人になってしまう人が多い。昨年、陽だまりクラブを開催したときは15名ほどが参加しており、泊お楽しみクラブになってからも、会員登録している方が現在35名（一番若い方で71歳、最高年齢は大正15年生まれの方）で、そのうち毎回20名～25名ほどが参加している。

この泊お楽しみクラブの活動を行ってよかった点は、参加している人同士で欠席者の情報を共有していることである。公民館での行き帰りにお互い手を引いたり、肩をかしたり、場合によっては車で送迎もしている。今まで地区行事に参加しなかった人が参加するようになり、これは大変よいことだと思っているが、課題は活動費である。

活動資金については、岩手県の高齢者社会貢献活動サポートセンターのご近所支え合い活動助成金の制度を受けた。この制度は、ご近所同士の支え合い活動などを行うことで、3年間で最大60万円まで助成を受けられるもので、今年度は30万円の申請に対して21万円ほどの助成を受けることができた。この助成金のほかに特別な行事のときには1人1,000円の会費を集めることがある。ただ、申請するための書類がとても細かく難しく、さまざまな制限もあるため、2年目の申請についてはどうしようか悩んでいる。

自分たちの健康維持と楽しみのために始めた活動だが、一人で寂しく一日を過ごすことがないように、このような場所が市内に広まり、たくさんの人が笑顔で年を重ねていけるようなまちづくりを市にもお願いしたい。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

矢作の精米サロンだが、きょうはご本人たちが来られないということで、馬場さんと大和田さんがビデオを撮ってきてくれた。この動画を見ていただきたい。

③保健課 大和田介護予防指導員：

誰でも気兼ねなく立ち寄れる通いの場として、市内矢作町二又地区にある精米所をサロンにした「精米サロン」をご紹介する。誰ともなく集まり（男性が多い）、いつの間にか看板も掲げられ、ごく日常的な会話の中に情報交換や人との交流が自然に生まれている地域の中の居場所（通いの場）である。まず、真ん中の青い帽子の方が精米サロンの家主。右側にいる男性は、被災してみなし仮設ということで矢作に住んでいる。

次は、駐車場の奥に車が見えるが、偶然にもこの日お客様がタイミングよく来てくれた。また、部屋の中に「はまってけらいん かだってけらいん」の旗があるが、これを置いていったのは亮平先生だそうだ。先ほどの青い帽子の家主は村上さんといって 80 歳で、通称「ねこ」という、30 キロもある一輪車を軽々と持ってしまいが、まったく問題がないそうだ。

これは、精米を頼んだご夫婦が用足しから戻ってきたところである。後から、この夫婦が大きな事故に遭われた経験があり、お二人でそれを乗り越えて地域の方と交流をしていると聞いた。皆さん、米を精米しなくてもいいので、ぜひ気軽にお立ち寄りいただきたい。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

馬場さんにフォローをお願いします。

馬場地域福祉課長補佐：

本日ここにお集まりの方々には、支援者や団体の方が非常に多いと思うが、この会議は誰でも参加していいもので、地域住民にも参加してほしいと強く考えている。通いの場について発表した3つの団体は、それぞれ別な地域で内容も異なる通いの場を創出している。皆さんも自分の地区にどのような通いの場があるのかを考えていただきたい。

これは皆さん方もご存じだと思うが、自助・互助・共助、公助がある。「自助」がはまらせん農園で、現在市内で13カ所ある。「互助」は、俗に言うボランティアや住民組織の活動、「共助」が社会保険制度及びサービス、「公助」は、福祉事業等、生活保護や人権擁護、虐待対策に分けられる。これは、資料にもあるので、持ち帰って読んでいただきたい。

きょうは、3つの団体の方々に「つながりを持ち続ける理由」ということで、キーワードを言っていた。当たり前前の思い、考えを行動に移し、自分にとって必要だから、〇〇さんに必要だからという単純な思いから現在に発展しているというのは事実だと思う。今回皆さんと共有したものについて、広報紙や民児協理事会・チームけせんの和の通信でもっと知ってもらう機会を設けたり、それぞれの活動を報告し他地域・他団体と交流することによって、活動をみんなで認め合えることを目的にしたフォーラムを実施したい。また、この未来図会議を「きょういく・きょうよう」の場として、地域住民に参加していただき、「はまってかだって」をさらに発展させていきたい。

(3) グループで「はまってけらいん、かだってけらいん」

テーマ：つながりを持ち続けている事例から学ぶこと

・すごいね！ すばらしいね！ なぜ続いているの？ 何が大事ななの？

・ 次の具体的な実践につなげるには？ 自分の地域にはないかな？

1 グループ発表：保健課 蒲生恵美保健師：

すごいね、なぜ続けているの？ では、「会員がふえている」「支え合い」「一致団結している感じがある」「楽しいから」「やる気がある人がいる」「自然体だから続けられる」ということが出た。

自分の地域では、「上浜田構造改善センターでお茶っこ会をやっている」「朝日のあたる家が、誰でも気軽に通える場になっている」「近所の人にみんな自由に集っている」などが挙げられた。

2 グループ発表

すごいね、なぜ続けているの？ では、「歩いて行ける」「人とかかわりたい」「家に一人ではいたくない」「楽しいから続けているし、続けられる」「気を使わずに参加できる」「地域のまとまりが強い印象」「先に立つ人の行動力がすばらしい」「内容が楽しそう」「お互いさまでやっている印象」「芸達者が多くて楽しい」「気兼ねなく何でも話せる関係」「公営住宅に入居された方が明るく変わった」「外出することで近所のお互いの様子がわかる」などが出た。

自分の地域では、「広田町に俳句の会」「小友にノルディックウォーキングの会」「高田町に小さい畑を共同でつくっている」「朝日のあたる家」がある。

3 グループ発表：保健課 佐藤咲恵包括支援係長：

すごいね、なぜ続けているの？ では、「ワーカーズコープの特技を生かして活用すること」「田端のコミュニティが保たれ、中心になる人がすばらしい」「やっている人や見ている人がおもしろがって、楽しんでいる」「集まりたい理由がはっきりしている」「集まっているうちに楽しくなってくる。世間話が好き」などが出た。また、社協や支援者側からつくるサロンは、「業務の中で流れるようにスケジュールを組みがちだが、住民主体の場合は、きっちり計画を立てないほうがいい」「高齢者の集まりは健康に関することを聞きたい」という声が上がった。

自分の地域では、6人でお茶会を始めたところがある。私たちが無理にお膳立てしなくても自然発生的に出てくるグループはあるということだ。ほかに米崎仮設のボンジュールがあるが、そこは集団移転した方々が多いので、集まれば移転先で何かやるのではないかと期待感がある。

4 グループ発表

すごいね、なぜ続けているの？ では、「場所があることも大事」「きっかけからつなぐこと」「お金を出すことで気楽に参加できる場合と逆にいきにくくなる場合もあるが、1回の負担を減らすと楽しさがあつちく」「できる範囲でできることだと長く続く」という話があった。

5 グループ発表

すごいね、なぜ続けているの？ では、「義務感がないのは参加しやすい」「内容に興味があり、気軽」「集う場所がある」「人とのつながりがこちよいい」「顔見知りになれる」「集会所へ行く健康管理がすごい」「住民の笑顔」「一つのことを成功させる取り組みが素晴らしい」などが挙げられている。

自分の地域では、「会員制の老人クラブ」「社協提供でも仮設住宅サロン」「はまらっせん農園での交流の場」「菜園クラブが活動している」と聞いた。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

きょうは泊お楽しみクラブの藤原さん、吉田さんにおいでいただいたので、一言ずつお願いしたい。

藤原氏：

きょうは、いろいろなことをよく知った。皆さんのやっていることはとてもすばらしかったので、これからの参考にしたい。

吉田氏：

88歳になっても90歳になっても、みんな元気で集まってくれるのが本当にいいことだと思っている。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

地域福祉課という新しい名称だが、通いの場づくりは地域福祉課だけでなく、いろいろな人が仕掛けなければいけないというのは何となく伝わったと思う。

高田には、仕掛けているうちに、できる人ができるときにできることをやってくれる土壌が既にある。ワーカーズコープさんたちのようにノウハウを持っている人たちが少し仕掛けると、いろいろな住民たちが集まってくる。そういうことを仕掛け続けたい。それが未来図会議の大きな狙いだということを改めて確認した。

3. その他連絡・アナウンス

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

協働センターから「まちづくりコーディネーター育成講座」、大船渡病院の村上先生から「リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2016 さんりくかまいし」、「おはようさん」、「朝日のあたる家」のペーパーをいただいた。咲恵さんから一言。

保健課 佐藤咲恵包括支援係長：

8月10日に「通い場づくりってどうなの、みんなが負担のない通い場をつくるのにはどうするの」という学びの会を昼と夜の部に分かれて開催する。

◇次回：平成28年8月19日（金）

メインテーマ（仮）：NPOのつよみを活かしてもらうには

…改めてNPOって？ 震災後の市内での活動の実際は？

会場：市役所第4号棟第6会議室